

Let's Know Hiroshima Castle.

しろうや！ 広島城



No.67

すごのお屋敷があったんですよ！ - 江戸上屋敷探訪

「しろうや！広島城」No.46でご紹介したように、広島城本丸上段には「本丸御殿」という広大かつ立派なお屋敷がありました。しかし、広島藩浅野家にはすごのお屋敷が江戸にあったのです。もしかしたら「本丸御殿」よりもすごいかも！！

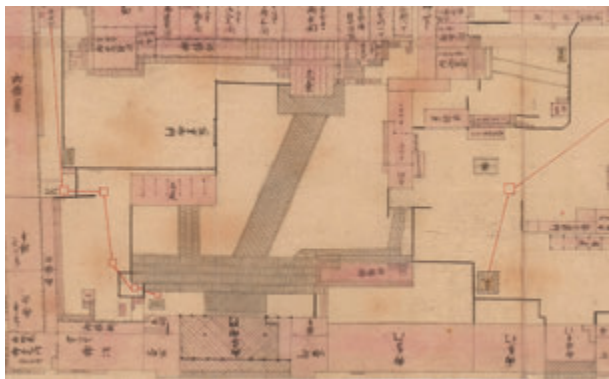


「江戸御上屋敷絵図」 広島市立中央図書館（浅野文庫）蔵

江戸時代、ほとんどの大名は「武家諸法度」によって国許と江戸とを1年毎に往復する「参勤交代」が義務付けられていました。このため、各大名は江戸で滞在し、お勤めをするための屋敷を幕府から拝領（もらいうけること）していました。広島藩主浅野家も江戸城の南側すぐ近く、現在の東京都千代田区霞ヶ関（総務省や国土交通省の建物がある場所）に上屋敷を設けて

いました。上の図は広島市立中央図書館（浅野文庫）が所蔵している、上屋敷の絵図面です。10,000坪（約33,000㎡）を超える広大な敷地面積があり、殿様はここで家族と過ごすだけでなく、幕府や他の大名との連絡調整を行うなど、政務を行う空間でもありました。このため、殿様たちの居間や庭園などがあるプライベート空間と政務を行う施設、家臣の住まいである長屋

や厩舎などの空間とで構成されていました。図を見ると屋敷の中央エリアは黄色系、その周囲は桃色系とに色分けがされているのがわかります。黄色の部屋には、「居間」や「寝間」などが書かれてあり、プライベート空間であるということがわかります。この二つの機能を持った屋敷はどのようなものだったのかちょっと見てみましょう。



玄関と御客御門のようす (拡大)

① 玄関について

まずは玄関へと通じる門。屋敷の顔ともいえる場所です。大名としての体裁を保つため、立派にしておかねばなりません。広島藩浅野家の玄関は朱塗りの門構えとなっていて、かなり豪華で立派だったようで、道を挟んだお隣さんの福岡藩黒田家の屋敷とセットで江戸の名所になっていました。江戸時代のガイドブック『江戸名所図会』や錦絵などで多く紹介されていました。川柳にも「関一つ安芸(広島)筑前(福岡)の国境」というのが残されています。

平面図ではこの門の豪華さがわかりにくいのですが、下の絵で見ることが出来るように、中央の霞ヶ関坂を挟んで右側が朱塗りの門を擁した浅野家、左側が黒門の黒田家で、立派な屋敷の姿を見ることができます。また、通りには往来する人でにぎわっているようすもうかがえます。ちなみに、このような朱塗りの門は、将軍家からお嫁をもらった大名にしか許されていなかったそうです。



「東都名所霞ヶ関全図」 広島市立中央図書館(浅野文庫)蔵

でも、この豪華な門を誰も能通过ることができたかと言えばそうではありません。図面に「御

客御門」と書かれているように、将軍や他の大名が訪ねて来るような特別な時にのみ使われました。では通常使われる所はというと、「御客御門」の右(東)側少し離れた場所に「御勝手門」というのがあります。この他にも何カ所か出入口が設けられていたのです。

② 庭について



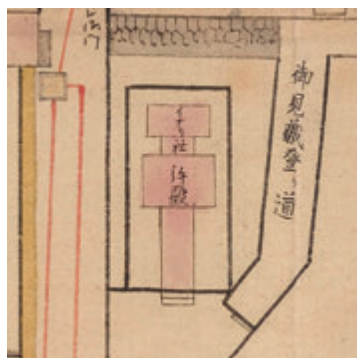
春秋園のようす (拡大)

大名庭園と言えば金沢藩前田家の「兼六園」や岡山藩池田家の「後楽園」などを思い浮かべられると思いますが、広島にも城の東側に「縮景園」があります。そして江戸の上屋敷内には「春秋園(元は熙春園)」と名付けられた立派な庭園が設けられていました。上の図にあるように、池や築山、土橋はもちろん滝まであって、園内をぐるりと回りながら楽しむことができていました。藩の儒学者である頼春水が天明4年(1784)に著した『春秋園記』によると、園内には鶴のつがいまでも飼われていたようです。また、最後の藩主浅野長勲によると、この庭は深山幽谷(人けがなく、ひっそりとした奥深い山や谷)の雰囲気を持っていたのだが、外の通りを行きかう荷物を運搬する人の掛け声がそれを台無しにしていたとのこと。さらに、そばには「金魚池」が設けられています。室町時代に中国から伝わった金魚は、大名や富裕層の贅沢な趣味として広まりました。また金魚の赤色は、病魔を遠ざけると信じられており、縁起の良いものとして好まれていました。金魚専用の池をわざわざ造っていたということは、たくさんの金魚が飼われていたのでしょうか。

それにしても、この図面はなぜ庭だけが情景のわかるように細かく描かれているのでしょうか?もしかしたら、この図面に携わった人が、この庭に特別な思い入れがあったのかもしれない。

③ 稲荷社について

さらに屋敷の奥に進むと、神様が祀られている一画があります。祀られているのはお稲荷さん(稲荷社)です。江戸時代には屋敷の守り神

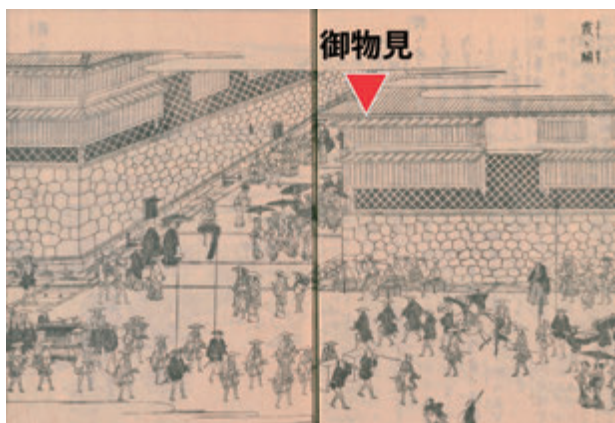


稲荷社のようなす(拡大)

として広く信仰の対象となっていました。大名屋敷だけでなく、江戸の町には小さな祠を含めるとあちらこちらで祀られていたとのこと。そして今でもビルの屋上や通りの片隅などでも稲荷社が祀られているのを見かけることができます。実は広島城の三の丸にも江戸時代、稲荷社が祀られていました。稲荷社の祭日にあたる二月最初の午の日は「初午」といって、城下の人々も詣でることができたのです。多くの人でにぎわったという記録もあり、深く信仰されていたということが窺えます。

④ 物見について

ふたたび入口の方に戻ってみましょう。「御客御門」の左(西)側は通りの角まで二階建ての建物が設けられていました。その角のところは絵図では「御物見」と書かれています。ここは江戸城の桜田門へ続く通りと霞ヶ関坂とが交わる場所にあたり、日々江戸城へ登城する武士の行列や往来する人々ににぎわっていました。また、天下祭と呼ばれていた「山王祭」の時には、山車・神輿などの賑やかな行列が屋敷の前を通過するルートになっていました。こうした様子を屋敷の外に出ることが容易にできない人々(奥方など)がここで窓越しに眺めていたのです。



『江戸名所図会』 国立国会図書館デジタルコレクションより

⑤ 謎の赤い線と四角(□)

ところで図面のあちらこちらに朱書きの線と四角が記されているのに気づきませんか。屋敷中を縦横無尽に書かれています。所々四角の枠の中に「上水」とあります。これは上水道の

敷設をあらわしているのです。江戸時代といえば井戸水と思いがちですが、元々埋め立てで拓がった江戸の町では、飲料用としての井戸水が限られていたことから、玉川や神田川の上流からわざわざ木樋(水道管)などで水を引いて町中に行き渡らせていたのです。です万が一、大切な水道管を壊したりしたら大ごとになるので、このようにきちんと書き記されているのです。

⑥ 赤い建物の謎

最後に、下の絵を見てください。霞ヶ関の坂の上から坂下に向かっての様子が描かれています。なので先ほど紹介したのと位置関係が変わって右側の屋敷が福岡藩黒田家、左側が広島藩浅野家となります。そして浅野家側に、通りに少し飛び出して赤い小さな建物があります。これは何でしょう？



『東都名所霞ヶ関之図』 広島市立中央図書館(浅野文庫)蔵

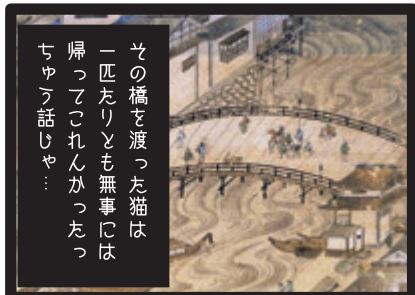
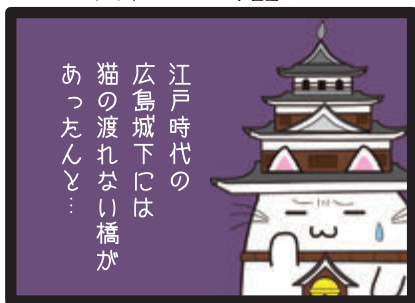
よく見ると、建物の中に武士が通りに向かって座っているのがチラッと見えます。これは「辻番所」というもので、今の交番のような役割を担っていました。町の治安を守るため道の交差点などに設けられていたのですが、幕府だけでなく各大名も設置して、周辺地域に睨みをきかせていたのです。この辻番所は今回ご紹介している「江戸御上屋敷絵図」にも書かれているので、ここは浅野家が設けたものだということです。でもこの絵からはのんびりとした様子しか伝わって来ず、もしかしたら座っている人は居眠りしているかもしれませんね。それはそうと、霞ヶ関の坂の上から海が一望できたなんて…高層ビルが立ち並ぶ今の東京からは想像できません。

この他にもこの絵図からいろいろな情報を得ることができます。興味のある方は広島市立図書館のサイト貴重資料アーカイブ(<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJJS02U/3410015100>)ものぞいてみてください。もしかしたら新しい発見に出会うかもしれません。

(山脇一幸)

しろうニャ！広島城～猫が恐れる〇〇橋～

広島城下の噂話…



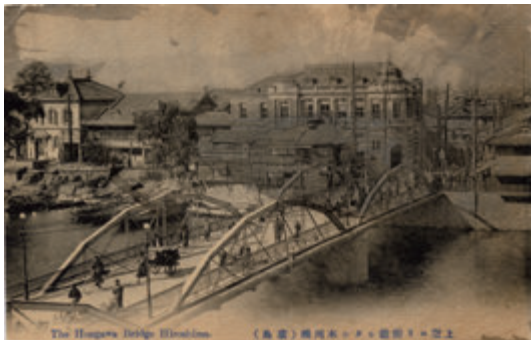
今回は、しろうニャさんが江戸時代に広島の猫たちの間で有名(?)だった噂話を教えてくれるそうですが…?

広島は、言わずと知れた「水の都」。現在、市内には太田川放水路、天満川、本川(旧太田川)、元安川、京橋川、猿猴川の6つの川が流れています。それぞれの川には、大小様々な橋が架けられており、広島の風景に彩りを添えています。

しかしながら、広島の川に今のようにたくさんの橋が架けられたのは明治時代以降のことで、江戸時代の広島城下には、橋は西国街道などの大きな道沿いを中心に、数えるほどしかありませんでした。しろうニャさんの恐れる「猫屋橋」は、西国街道沿い、江戸時代には本川に架かっていた唯一の橋で、当時この橋一帯は、多くの人や物が行き交い、賑わっていました。「広島城下絵屏風」や「芸州広島図」にもその様子が描かれています。毛利輝元が広島城を築いていた天正年間末頃(1589～1592)に、猫屋九郎左衛門が私財を投じて架橋したことが名前の由来だそう。ちなみに「猫屋」は屋号で、猫を獲って売っていたわけではありませんのでご安心を。



この猫屋橋、明治30年(1897)には木橋から広島初の鉄橋に架け替えられ、そのころには「本川橋」と改称されたようです。初代の鉄橋は、昭和20年(1945)原爆で損傷、さらに同じ年の枕崎台風で落橋しましたが、橋脚は現在も残され、新しい橋を支えています。



というわけで、もう、猫ヤバくないから心置きなく渡ってね、しろうニャさん (吉田 文)

しろうや!
広島城

編集・発行
公益財団法人広島市文化財団
広島城
〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話:082-221-7512
FAX:082-221-7519
令和3年2月22日発行

広島城利用案内
開館時間:9:00～18:00
(12月～2月は9:00～17:00)
入館の受付は閉館の30分前まで
入館料:大人370円(280円) 中学生以下無料
高校生相当・シニア(65歳以上)180円(100円)
()内は30名以上の団体料金
休館日:12月29日～12月31日(臨時休館あり)
ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>